

油谷治郎七

油谷治郎七は同志社では忘れられた存在である。しかし「日本社会運動人名事典」や「日本キリスト教歴史大事典」「京都教会百年史」の中にその名前が記載されている。筆者がその名前を知ったのは、鈴木文治著・労働運動二十年である。その中で次のような記載がある。「油谷治郎七氏も亦、大正五・六年頃三・四年の間、友愛会の嘱託として、主として教育方面に活躍された。同氏は人も知る同志社の出身にして牧職にありし人、在米十数年、哲学社会学等の研鑽を積まれ、その頃帰朝されて、宗教、矯風事業等に活躍されて居たが、特に乞うて友愛会に入職を求め、私の及ばざるところに協力を願ったのである。私が大正五年再渡米の折には、留守会長の大任をつと

香川孝三

められた。この記述をみて、油谷治郎七とはどういう人間なのか興味をいだいた。

彼は明治四年一月四日大阪府泉南郡鳥取村大字石田九二番地に生まれ、昭和一〇年一月九日死亡した。六五歳で死亡したことになった。家は代々農業に従事していたが、明治二二年一八歳で梅花女学校の教員となった。牧野虎次による追悼文では、「十八歳にして母親を喪はれ十九歳にして村の小学校教員となり、翌年大阪日吉小学校教員となる」(廓清二五卷一二号四七六頁)となっており、違う内容になつてゐる。梅花女学校教員の件は、「梅花学園九十年小史」五九頁に、明治二二年度の附属小学校教員として名前があがつてゐる。この時梅花女学校校長であつた宮川経輝

によつてキリスト教徒として洗礼をうけた。その後同志社神学校に入学したが、いつ入學したかはわからない。牧野の追悼文によれば、「自給自活の方法を講ぜねばならぬ必要上、他の悠長な学生の如く正規の順序を踐むことが出来ず」、「どこ迄も独学力行の人であつた」。二十四歳の時、父を失ひ弟妹四人を抱え生活に苦労したようである。神学校にかよひながら、四条教会日曜学校講師をつとめ、講義所の手助けをしていた。その働きがみとめられ、明治二十八年二十四歳の時四条教会仮牧師に就任した。しかし健康を害したこともあつて、神学校を明治二十九年中退した。と同時に校友会に入会した。

健康を回復してから、教会の活動に専念し、教会内部の整備につとめた。新しい会堂を建築し、日曜学校の充実につとめた。この時の活動が、その後の人生を決定づけるできごとを生んだ。一つは北越学館や新潟女学校と深いかわりをもつた阿部欽次部と知り合いになつたことである。彼は成瀬仁蔵から洗礼を受け、キリスト教教育につとめたが、明治三十三年加島銀行の役員になり、大阪、京都、東京で勤務をした。京都に勤務中、四条教会

の日曜学校校長として奉仕した。彼の娘である阿部シゲルが、後に油谷と結婚した。二つ目は、廃娼運動とのかかわりをもったことである。教会で廃娼運動のための講演会を開き、油谷自身も講演したり、廃娼論のパンフレットを配布した。これが、後に廓清会理事になるきっかけとなっている。さらに公害問題や労働問題という社会問題への関心をつよめていった。友愛会の活動につながる素地が四条教会時代にできつつあったといえよう。

明治三十三年五月二日按手礼がおこなわれ正牧師になったが、明治三十五年八月辞意を申し出、九月一日横浜港からアメリカ留学に出発した。ニュー・ヨークのユニオン神学校、コロンビア大学で学んだ。コロンビア大学に問い合わせたところ、一九〇二年から一九〇六年までユニオン神学校、一九〇二年から一九〇八年までコロンビア大学で、聴講生 (partial student) として学んだという記録がのこっているという返事であった。最初にあげた「事典」には哲学博士の称号をもっているという記述があるが、コロンビア大学からはその記録はないという返事であった。十年以上に及ぶアメリカ留学中、神学や社会学を

勉強したようであるが、その間の生活をどのように維持したのであろうか。日本の雑誌や新聞にアメリカについての記事をのせて、原稿料の送金をうけていたようである。しかし、それだけで生活できたとはおもえない。

明治四十五年ヨーロッパ経由で帰国の途につき、大正二年二月日本に帰ってきた。帰国後大正二年二月二日大阪教会で、恩師である宮川牧師の司式で阿部シゲルと結婚式をあげた。油谷は四十二歳であった。阿部シゲルは油谷の渡米前に婚約しており、結婚まで十年以上も待ちつづけていたことになる。

結婚後、彼の仕事をどうするかが問題であった。彼には三人の子供がいたが、現在生存している長女の松田恵美氏によれば、同志社で教えるという話もあったようであるが、それがだめになり、牧師として働くこともしなかった。なぜ牧界にはいらなかったのか分らない。

帰国後大正二年、彼は廓清会の理事になった。アメリカから帰国の途中イギリスに寄った時、英国廓清会幹事のグレゴリー氏が日本にいくにあたって相談をうけ、その世話をこなった。それが直接のきっかけとなり、廓

清会と関係をもつようになった。

次に友愛会と関係をもった。どういう経過で関係をもつようになったのかわからないが、鈴木文治の依頼で友愛会講師になった。友愛会の機関紙「労働及産業」四十三号（大正四年三月発行）には、友愛会講師として名前がのっている。安部磯雄、吉野作造、相原一郎介、内ヶ崎作三郎、武田芳三郎、松尾清次郎、添田寿一、向軍治、三並良とともに彼の名前があがっている。各支部で講師として講演をおこなった。アメリカ帰りとして新しい外国の情報を教えることが期待されたのではないかとおもわれる。

「労働及産業」五十三号（大正五年六月発行）では、彼を教育部長に嘱託としてお願いした旨の記録がのっている。教育担当の責任者となり、大正五年九月九日鈴木文治が二回目の渡米に旅立ち、大正六年一月帰国するまでの四ヶ月あまり、彼は友愛会会長代理をつとめた。この間池貝鉄工所で六三〇人あまりの労働者が給料二割増を要求してストライキに入ったケースで、彼は調停に入り、一割のアップで解決している。大正七年四月板倉定四郎が友愛会横浜出張所の主任になったために、

その後をついで会務部長を兼務したが、その五月末友愛会をやめた。「労働及産業」八十三号（大正七年七月発行）に、「啓上小生聊か思ふところあり五月限り友愛会本部を辞し申候。職工諸君の向上進歩を希ふの一念に於ては相変り不申候。旧に倍する御交誼を願上候」の文章を残して友愛会を去った。

なぜ友愛会をやめたのか。その理由についての記録はない。それを探るためには、彼の友愛会での役割を見ておく必要がある。友愛会講師、教育部長という役職から分かる通り、彼は労働者教育に力を注いだ。その教育内容は「労働及産業」に掲載されている論文によって知ることができる。それらをあげてみよう。

労働者将来の覚悟

五十五号（大正五年三月）

産業の憲法 五十七号（大正五年五月）

英国婦人の戦時に於ける労働

五十九号（大正五年七月）

品性の勢力 同号（同）

労働者の大敵 六十号（大正五年八月）

八時間労働 六十三号（大正五年一月）

米国に於ける鈴木会長の活動

六十四号（大正五年二月）

労働瑣言 六十五号（大正六年二月）

労働彫鑄大家 ミュニオン

同号（同）

米国労働組合の発達

六十七号（大正六年三月）

独逸職工組合の発達

六十八号（大正六年四月）

独逸に於ける職工組合発達の歴史（二）

七十号（大正六年六月）

独逸に於ける職工組合の発達（三）

七十二号（大正六年八月）

戦争と米国労働者

七十五号（大正六年一月）

浮浮してはならぬ

七十七号（大正七年一月）

不景気の風が吹いて来た

七十八号（大正七年二月）

物価と工賃の調節

七十九号（大正七年三月）

これらの論文を読んで気のついたことをまとめてみよう。一番目は、労働者の品性を保持することを強調していることである。奴隷でも機械でもない立派な人であるという自覚

をもって見識と威厳を有するとともに、その品性を養ってその権利と義務を全うすることを主張している。これはクリスチャンらしく精神主義的な労働観を示している。二番目は、労働運動の役割をのべた点である。労働者の自活の力を養い、品性を磨くとともに経済的素養を高め、その団結によって地位の改善をはかることを労働運動の役割としている。これは、穩健な労働組合論を展開している。三番目は、その英語力を生かして、外国の事情を紹介していることである。以上三点をまとめれば、大正四年から七年という友愛会の初期の時代に、労働者の品性や穩健な労働組合論を説いて、啓蒙的な役割を果たしたといえるであろう。これは、鈴木文治が友愛会を結成し、キリスト教的人道主義の精神に基づき社会正義を実現しようとした目的にぴったり一致していた。だからこそ鈴木文治が油谷を友愛会にひっぱってき、会長代理の地位にすえたのであろう。

それでは、なぜ彼は友愛会を去ったのであろうか。彼の個人的動機はうかがい知ることができないが、その後の友愛会の動きから、客観的に次のような見方が可能ではないかと

思われる。大正八年八月の友愛会七回大会において、友愛会は「大日本労働総同盟友愛会」と名称を変更した。これは友愛会が本格的な労働組合組織に移行しつつあることを示すできごとである。さらにサンジカリズムがだいに始まる頃であり、労働運動のあり方をめぐる左右の対立が芽生え始めてきたころである。油谷は左右の対立が始める前にやめておき、キリスト教的倫理観にもとづき労働者を啓蒙するという役割を果たして自ら友愛会から身をひいたと理解されよう。

友愛会をやめた後、大正八年から外務省嘱託として翻訳の仕事をした。この外務省時代のことについては、まったく分からない。得意の語学力をいかして仕事をしたとおもわれるだけである。大正の終わりごろには外務省もやめたようである。その後廃娼運動に力を入れていく。大正二年廓清会理事になってから、ずっと廃娼運動にかかわっており、特に外国の廃娼運動の紹介につとめた。直接欧米の関係団体に手紙をだしたり、駐日大公使館の友達を訪問して情報を手に入れていたようである。アメリカ留学や外務省嘱託の経歴がここでいきていたようである。その情報は廓

清会の機関紙「廓清」に発表されている。その代表的なものだけをあげておこう。

- 実績上より公娼制度を排す 三巻六号（大正二年六月）
- 廃娼後の群馬県人に望む 四巻二号（大正三年二月）
- 純潔の双美 四巻十二号（大正三年二月）
- 欧州戦乱と廓清運動 五巻六号（大正四年六月）
- 海外だより 五巻九・一〇号（大正四年一〇月）
- 外人の観たる芸妓 五巻一二号（大正四年十一月）
- 世界最古の倫理想 六巻一号（大正五年一月）
- 海外廓清だより 六巻二号（大正五年二月）
- 民族衛生論 六巻四号（大正五年四月）
- 松村介石氏の説を評す 六巻五号（大正五年五月）
- 存娼より廃娼へ 六巻七号（大正五年七月）
- 米国戦時の廓清運動 八巻一号（大正七年一月）
- 女子保護同盟 八巻六号（大正七年六月）
- 廓清運動と法制 八巻九号（昭和四年九月）
- 二〇巻二号（昭和五年二月）
- 八巻八号（大正七年八月）
- 仏国戦時の廓清運動 八巻二一号（大正七年十一月）
- 海外醜業婦に就いて 八巻二二号（大正七年十二月）
- 文明改造と労働問題 九巻一号（大正八年一月）
- 田代博士の花柳病防止案 九巻五号（大正八年五月）
- 海外だより 一二巻三号（大正一一年三月）
- 廃娼事蹟考 一六巻四号（大正一五年四月）
- 廃娼後の欧州 一六巻一〇号（大正一五年一〇月）
- 最近の廃娼 一七巻二号（昭和二年二月）
- 国際道盟の廃娼問題 一八巻八号（昭和三年八月）
- 公娼廃止の記録 一九巻三号（昭和四年三月）
- 国際廃娼運動の情勢 一九巻九号（昭和四年九月）
- 米国の性病統制 二〇巻二号（昭和五年二月）

性病患者雇用禁止

二〇卷三号 (昭和五年三月)

米国の母親年金制度

二〇卷八号 (昭和五年八月)

和蘭の風紀政策

二〇卷二一号 (昭和五年十一月)

婦人警察官の現勢

二二卷五号 (昭和六年五月)

瑞典の社会衛生政策

二二卷八号 (昭和六年八月)

基督教倫理と性問題

二二卷二一号 (昭和六年十一月)

任意診療と強制診療

二二卷一号 (昭和七年一月)

娼婦寄生者の取締に就て

二二卷二号 (昭和七年二月)

露西亞の風紀政策

二二卷四号 (昭和七年四月)

社会的疾患と家族

二二卷五号 (昭和七年五月)

性病の統制

二二卷八号 (昭和七年八月)

シカゴの風紀裁判所

二二卷二二号 (昭和七年十二月)

ボストンの婦人審判所

二三卷三号 (昭和八年三月)

紐育の婦人審判所

二三卷四号 (昭和八年四月)

英領植民地の風紀政策

二三卷七号 (昭和八年七月)

蘭領東印度の風紀政策

二三卷一一号 (昭和八年十一月)

社会衛生と保護的施設

二四卷五号 (昭和九年五月)

社会衛生と医学的措置

二四卷六号 (昭和九年六月)

ドイツの強制絶種法

二四卷一一号 (昭和九年十一月)

ユ国性病撲滅法

二四卷二二号 (昭和九年十二月)

欧州十五市の娼娼概観

二五卷二一号 (昭和一〇年一月)

世界の動き (遺稿)

二六卷二二号 (昭和一一二年二月)

これらの論文は、世界各国の娼娼運動、性病予防や社会衛生、風紀政策、女性保護を論じている。外務省をやめてから、一時脳溢血で倒れ、休養していた期間を除き、精神的に論文を書いている。その原稿料が生活の糧で

あったこともあるが、まめに書いていた。村上雄策氏の追悼文では、「廓清運動に対する正しい理解の下に筆を執られたので、「娼娼運動に何れだけ役立つかわからない」と述べている。筆によって、娼娼運動に貢献したことがよく分かる。

以上のとおり、油谷の社会活動は、四条教会の牧師としての仕事、友愛会の教育担当の仕事、娼娼運動への貢献の三点である。仕事を交えているが、いずれもキリスト教徒として仕事をおこなった点は共通している。

牧野虎次は追悼文で、「外務省嘱託をやめられてから、約十年の残りの生涯は不幸にして不遇の地位に呻吟せられ、晩年ことに振るはなかつたことは、旧知の最も惜む所であった。海外の事情には精通せられ、敢為の気象には富まれ、筆を執っても弁を揮つても一流の域に立つことの出来た君が、折角帝都に二十余年の生活を営みながら、検舞台に立つ機会を得ず、空しく志を抱いて終に逝かれたのである」と油谷の晩年を惜しんでいる。

彼の死亡は、「同志社校友同窓会報」二〇三号に記録されている。

(大学文学部教授)

ベトナムへの旅

——この物価差にどう対処するか——

横山卓雄

ベトナム・ホーチミン市

七月末に大阪空港から、ベトナムに滞在中の小倉直子嬢に電報を打った。八月末にホーチミン市（旧サイゴン市）へ行くので、その打ち合せのためである。手紙をだすと四〇日かかることがあるので電報にした。

彼女はベトナムの日本語学校の日本語教師となつて赴任している同志社大学卒業の女性である。何と四〇〇人の生徒が日本語を習いに来ているという。ホーチミン市にはもう一つ日本語学校があつて、そちらのほうは一〇〇〇人の生徒がいるとのこと。アジアの人々の日本に対する関心と期待を表しているの

あろう。

小倉さんはNICCOという民間団体の派遣だが、ともかくも月給が安い。一か月一〇七万ドンと日本でのデポジットが五万円である。一〇七万ドンは約二万三〇〇〇円であり、かつ外貨には変えられないという制限をもっている。つまり一年間むこうで生活をして、日本の銀行に六〇万残るといふことになる。

三月末にはホーチミン市でミニバスをかりて、一日観光ツアーをした。一〇〜一二人乗りだがそれを五人で借り切つて、昼食、日本語ガイドつきで一日二〇〇ドルである。小倉さんの月給の倍ほどが、一日の観光代である。もっとも一人あたりは四〇ドルだから、彼女

の月給の三五パーセントほどになる。

ホーチミン市で働いている彼女にとつては高すぎるので、ツアーなどにはいったことがないとのこと、案内を名目で参加してもらつた。南ベトナム解放戦線の勝利のシンボル・クチのトンネルに行つたのだが、ここはすばらしかった。

何しろ地下のトンネルの長さが二五〇キロだという。まずそれに驚かされる。中は三層になつていて、建物でいへば三階建てである。台所・会議室・指令室・食堂などがあり、会議室は五〇人がはいつて会議ができる規模である。

それぞれの部屋をつないでいる通路は細く、ところどころに落し穴があつて、そのそこには竹槍が上向きに植えられている。通路が細いのは、体型の大きいアメリカ兵が入つてきても、そこで腹がつかえて動けなくなつてしまふようにと考へてあるのだそうだ。戦争当時、南ベトナム解放戦線のハイティーンの少女少女兵が活躍したのだが、なるほどこのトンネルの中を走り回つて、自由に敵の背後にまわつて攻撃するのだから、身体は小さいほど有利だつたことを実感した。

こんなトンネルが掘れるのは、どんな地質なのかと不思議に思っていたが、間氷期の生成物である深層風化火山岩であって、自然の歴史の産物である。戦争にも自然の歴史が影を落としている。

アジアの日本人

アジアへ出ると日本人は金持ちと思われる。事実、タイなどの観光地では、いっばんに五〜六倍すごいときになると二〇倍の価格でものを売っているが、日本の人はそれを半分ほどにまけてもらって喜んでいるのをよくみかける。

一方、ボランティアで外国へ働きに行く人々には、金がまわらないようである。カンボジアでもボランティアは安ホテルに泊まっています、報道陣や政府機関の人々は、プノンペンの最高級ホテル、ホテルカンボジアーナに泊まっている。ボランティアの人々の気持ちは「あんなにキレイで、安全なところに泊まっています、よく危険だ危険だという記事がかけるものだ。あきれよ」といったところだろう。

日本のお金はバランズよく使われていないことを、いつも感じさせられている。それにしてもベトナムでの物価差にも混乱させられた。屋台のラーメンが二〇円の世界である。ここには、アジアの喧騒とエネルギーが残っている。一〇年もすればインドネシアのようにすっかり近代化して、ヨーロッパナイズされてしまうのではないかと思って、今のベトナムを見ておきたいというのが、今回の旅の目的であった。

ベトナムのホーチミン市は昨年から外国人でにぎわっている。日本の若者の姿を見ることも多い。今年の春からは日本からの直行便も飛ぶようになった。メコン川のほとりには、見事な近代的ホテルが完成し、その近くでは、中国料理の船上レストランがあり、夕方八時からメコン川を航行しながら食事をする事ができる。ただ、一人あたりの支払が一〇万ドンで、ふつうの若い人々の月給の二五パーセントほどだから高い。私がいったときはほぼ満席で、少なくとも二〇〇人以上が食事をしていた。外国人と中国系住民のようである。これが日本円で一〇〇〇円であるから矛盾を感じてしまう。

私にとつてベトナムは、ベトナム戦争についてのニュースからえた知識があるだけで、実感のない国であった。国際会議で一度だけベトナムの学者にあつたが、なんとなく、未開の国からの人という印象をもつてしまっていたように思う。こういう潜在意識をもたぬようにいつも心をいさめているのだが、やはり知らないということは恐い。今回のベトナム訪問でつづく反省させられた。

考えてみると、あのアメリカに対して、あそこまで抵抗した国民である。また旧サイゴンは長い間アメリカ人が大量に住んでいたところである。英語が日本より通じる、車もバイクも多い、国民の能力が高いなどあたり前なのに、訪問以前はそれに気がつかなかった。このベトナムでも、外国人が来るようになって、大統領府の観光料が五〇〇〇ドンから五〇〇〇〇ドンにかわった。もっとも外国人に対してだけである。日本人にとっては、五〇〇円ほどだからふつうだが、彼らにとつては月給の一割ほどである。どんな気持ちがあるのだろうか。我々日本人は、どんなふうにつきあえばよいのだろうか。

航空機塔乗のときの放送

バンコクでマニラ經由大阪行きのフライトにのった。搭乗に際して、注意があり、最初はシート番号が三〇以上の人々だけボーディングしてくれと放送している。日本人は放送されるとすぐほとんど全部の人々が行動しはじめ。困ったことに日本人以外の乗客は三〇人ほどなので、全乗客の八割ほどが放送の内容を無視して乗降口に殺到してしまうことになる。次の放送はシート番号二五〜二九の乗客についての案内であった。そのとき残っていたのは日本人以外と日本人は二人だけだった。もちろん放送は英語で行われているので、聞き取れない人も多いだろうが、注意して聞けばわかるだろう。団体旅行が多いのだから、はじめから教えておけばよいとも思う。理解に苦しむことだが、大阪空港で乗るときにはこういう放送がない。出発のときに奥の席からののだということを練習しておけばよいのと思ってしまう。

ベトナムには「外人」の泊まれるような施設はない

帰国のタイ航空の機内でのことである。うしろで若い日本人の男女がベトナムの海岸を窓からみながら話をしている。

女：「ベトナムは旅行できるの」
男：「できるだろう、でも外人が泊まれるような施設はないよ」

なんでもない会話の中に、日本人の特質がよくでている。まず、「外人」とは何か、これは外国人のことなのだから、タイ人でもカンボジア人でもベトナムにとつては外人である。どうも日本人のいう「外人」は白人のことを意味しているようだ。こんな短い言葉の中にアジアに対する偏見が表れているといっではいけないだろうか。さらにいえば、事実もまちがっている。ベトナムには「白人を含めて外国人」が泊まれる施設などいくらでもある。「ベトナムのようなところには、当然ない」という固定観念がいわせるのだろうか困ったことだ。こうしたささいなことが、いわれたほうには「ぐぐつとこたえるのである」

隣にすわりたがるのは当然か

シンガポールで団体客がのつてきたときの

ことである。私の乗っていたフライトは、ジャカルタ発シンガポール經由バウコク行きなので、シンガポールで乗って来た人々は知人どうしとなりあつて座れない。そこで、勝手に他人の席に座つてしまっている人がいる。こうしたずうずうしいのは中国人に多い。同じような条件では、日本人はどうするか。たとえば、バンコク発マニラ經由大阪行きの場合である。日本人は、大声で不平をいながらはいつてくる。「席がはなれて、困ったどうしよう」と不満をいう。エアーステスはあきれ顔である。こういうときのルールは、まず自分の席にすわり、落ち着いてから、となりの人に席をかわつてもらいたいと頼めばよい。普通はかわつてくれる。私もよくかわつてい。ところが、個人的に頼まないで、すぐエアーステスや搭乗員に頼む、文句をいう。これが日本人の習性のようなだ。外国人とつきあうためには、こんなところを直さなければならぬと思う。

ひとり旅はいろいろ教えてくれる。旅はひとりがいい。

(大学工学部教授)

新島先生と鎌倉の海浜院

八木政三

平成四年六月十七日、東京全日空ホテルで同志社校友会東京支部主催の新島先生、生誕一五〇年記念講演会が開催され、席上講師の同志社、社史資料室の河野仁昭室長より、先生は東京での大学設立資金の募金運動の心痛と疲労が重なり明治二十一年五月二十四日、日銀総裁 富田鉄之助代の斡旋で鎌倉の海浜院というサナトリウムに入院、療養されたとお話があった。鎌倉に在任して二〇年余になる私も海浜院という名前すら初耳で講演会の後で河野室長に更に詳しく場所や現状についてお尋ねしたところご存知なく、反対に出れば是非調査して報告して欲しい旨お話があった。先づ手始めに七里ヶ浜、由比ヶ浜沿

道の国道一三四号線のその昔療養所であった病院乃至ホテル、レストラン等しらみつぶしに一軒一軒飛びこみ、海浜院との関連を聞いてみたのですが、総て関係ありません。名前も聞いたことすらありません。との返事が返ってくるばかりでした。それならば市役所を訪ねて聞けばと思ひ窓口で相談の結果、市制施行五十周年記念として刊行された『図説 鎌倉年表、自天文元年 至昭和六十年』に海浜院の記事が記載されているとの助言を得たのである。

一方同志社の本部、資料室よりもご協力を得て海浜院に関する『新島襄全集第五巻』出遊記』並に『漫遊記』の抜粋。新島八重子に

よる『亡愛夫襄発病ノ覚』の資料を送っていただきました。これらの資料によりますと、先生は明治二十一年五月二十日、駐米公使として渡米する陸奥宗光の出発を横浜港で徳富猪一郎と共に見送り、翌二十一日徳富と別れた先生は藤沢を経由して鎌倉へ来ておられる。

当時はまだ鎌倉へは鉄道が通じていなかった為で人力車かなにかを利用されたようである。その翌日二十二日、先生は家族連れで静養にきていた日銀総裁、富田鉄之助代をその飯寓に訪ねられたが富田夫妻は先生が余りにも憔悴していられるのに驚き、医師を招いたのであるが、容体はやはり憂慮すべき状態にあり、富田代の飯寓で二泊静養の上、五月二十四日の午後海浜院に入院されたのである。即ち『出遊記』によると

五月二十一日

午前九時三十五分発浜、藤沢ニ至ル、藤沢ヨリ(二十一錢)鎌倉ノ三ツ橋与方八ニ投宿ス、此夜呼吸甚悪シクシテ眠成ラス、渋沢代、徳富代ニ書ヲ出ス

五月二十二日

此日 富田ノ寄寓所ヲ尋ヌ、病の容易ナラ



当時の海浜院

サルニヨリ、妻君ニハ予ヲ止メ、先ツ休息セシメ、而シテ医師ヲ招キ診察セシム、容体甚宣シカラス、予ヲ其ノ処ニ休息セシム、此夜一泊、一書生惟義ヲシテ続いろは文庫ヲ読マシム、眠ムル事八時間ヨ

妻君ノ世話周到、尽サヽルナシ、蒲団ヨリウガヒ又食物等ニ至ル、実ニ病人ノ好キニ応シテ尽之ヲ行ヒタルニ似タリ。予ノ到ル所

ニ如斯好意ノ人ヲ得ルモ亦皇天ノ恵ナル哉

五月二十三日

終日雨フル、尚一泊ス、此日、予ノ病ハ少シク宣シ、終日戸外ニ出テス

五月二十四日、晴天

午後、海浜院ニ入ル

と記されている。特に富田日銀總裁の奥様は大変気配りの心やさしい方であつて、洋食を好まれた先生も食事等至れり尽せりの看病を神のみえざる御手のお導きと二十二日の日記に感謝して書いておられるのである。

又漫遊記によると同じく当時のことを次の様に記されている。

五月二十四日

午後 海浜院ニ入ル、一室ヲカル価六十銭。食事ハ命ニヨル、室内ハ尽西洋風ニシテ実ニコンフォータブル・ルームト云フベシ。此夜、熟睡ス

五月二十五日

徳富氏、看護婦井上石女ヲ携テ来ル。此レハ富田君ノ、予ノ病ニカヽリ何人ノ看護スルモノナキハ甚覺東ナキ事ト思ハレ、徳富君ニ計リテ看病人ヲ遣シ呉レタルナリ、同代、午

大隈公、青木公、渋沢代二面会スル事ヲ托セリ、

同二十六日

海浜院ニアルモ、日々富田の寄寓所ニ行キ閑話シ、又度々昼メシニ招カレ、又妻君ト子供ハ度々院ノ方ニ来リ呉レタリ

——同二十七日ヨリ同六月十日迄 略——

六月十一日

此ノ日 鎌倉ヲ去

又先生の奥様の八重子さんの「亡愛夫妻発病ノ覚」によると

明治二十一年四月二十二日井上様（井上馨前外相）御邸ニテ発病ス 五月二十四日ヨリ相州鎌倉海浜院ニテ療養ス 妾ハ六月八日同所ニ行キ見レバ 亡夫ノ身体ハ非常ニ疲労ノ様子ニテ、足ニハ軽ロキ草履ヲ穿キ一手ハ杖他手ハ看護婦ノ肩ニ寄り静カニ歩ミ居リシ其様ヲ一見見タル時ニハ実ニ断腸ノ思アリ、妾ガ参リテヨリ朝夕浜辺 又タハ八幡宮、大仏マデ緩々ト歩ミテ散歩スルヲ常トシタリシガ六月十一日東京ニ帰り 麻布仲ノ町粟津様ノ御宅ニ御世話ニ相成リタリ。

と記されている。この様に先生の健康は最悪の状態にあつたにも拘らず大学設立に対す

る使命感と信仰の厚さが病苦を乗り越え、これを克服されたものと思われます。

扱って先生が療養された海浜院の所在については「鎌倉年表」(前掲)によると「海浜院」の建物が古写真として掲載され明治二十年八月一日の項に

十年ほど前から横浜の富商たちの間で計画されていた保養所が八月一日由比ヶ浜の松林の中に建てられ本日をもつて開院することになった。(同年七月二十九日付東京横浜毎日新聞)

しかし開院予定変更の記事が同純八月七日付に出されており開院は少し遅れたようであった。海浜サナトリウムの走りというべき海浜院は設備、食事など、すべて洋式で理想的な療養所で外人コックを高給で雇入れ、食事にも意を用い、先生も気に入っておられたようであつて、開院は先生の入院される九ヶ月ほど前であつた。当時としては理想的な療養所であつたが療養については厳格すぎて日本人の習慣にマッチしなかつた為に、一年位は繁昌したが翌二十一年遂に閉館の止むなきに至つたようである。むしろ横浜在住の外人が週末のレクリエーションなどで遠乗りして来

てサナトリウムの部屋を利用することになり、いつの間にかホテルの様になり、その儘「海浜ホテル」として開業したのであるが何月に転業したかということまでは書いていないが年表によれば九月十六日の記事の後に閉鎖の記事があり、おそらく秋以降であつたと思われる。従つて当然ながら先生退院の六月十一日はまだサナトリウムだつたわけである。

又年表の明治二十二年五月の項には、鎌倉ホテル、海浜院が近來外人客で繁昌した。座敷料は一日上等一円と記されている。

有名人も大勢宿泊して古き良き時代の国際的社交場となり隆盛を極め関東大震災、第二次世界大戦を生きのびたホテルも昭和二十年八月の終戦以後、進駐軍により接収されたが二十年十二月と翌年一月の二度あい次で起きた火災により全館焼失、今はその姿を偲ぶよすがもなく消滅したのである。あと地五、〇〇坪はそのままになつていたが昭和五十二年九月キリンビールの仔会社として、鎌倉シーサイドテニスクラブ」として十一面のテニスコート一〇〇台余の駐車場を有する会員制のクラブとして今日に至つている。勿論テニスクラブにも数度に亘り訪問——お話もう

けたまわり資料や海浜院の絵画の撮影も心よく許可していただいたのである。

なお、海浜院の当時の写真のネガと市内八雲神社の小坂昌美宮司が大切に保管されているとの情報を聞き、宮司にもお目にかかり、経緯をお話したところご理解を得て白黒フィルムをネガを拝借して焼付けたものです。

(昭和二十年旧制大学法経学部卒)

グリークラブの創始者 片桐哲先生を偲ぶ

同志社グリークラブの皆さん、ようこそ下北へお出下さいました。

風間浦小野村長さんが新島襄先生の記念碑をつくって下され、落成式には松山総長先生をお迎えし、この度は同志社の誇りであるグリークラブが碑前で演奏下されることを、天上の新島襄先生はさぞかしお喜び下されていることと信じます。この記念碑建立について並々ならぬ苦心をなされた河野先生は、皆さんに対して片桐哲先生のことをお話し下されていると思います。弟子の一人として私も片桐哲先生ご夫妻の思い出を書いて見たいと存じます。

樋口喜四郎

一、入学試験（昭和二年三月）

当時、青森・京都間は急行で二十四時間、鈍行で三十時間かかりました。同志社へ受験した私は、学科はそこそこできたつもりでした。口頭試問が片桐先生でした。

「君はわざわざ遠い青森から来られたが、新島襄先生を慕って来られたのですか」
と尋ねられました。

「ハイ、そうです」

といえよかつたのに、私はバカ正直に、「私は先輩の池田健三先生にすすめられ、へお前は同志社へ行け」といわれて参りました」

二、水午会

と答えた。片桐哲先生は岩手県のご出身であるので、隣県青森から来た若者に採点をよくして下されたようである。お陰で入学できました。尤も当時は入学競争率が二倍強でしたので、現在とは比較になりません。

予科では倫理を教えて頂いた。その頃同志社には東北出身の教授が数名おられて、学生と共に県人会を開かれていた。お茶とお菓子で親しく教授の先生のお話をきくことのできたよい時代であった。

予科の三年間、水曜日のお昼休み三十分くらいバイブルクラス。神学館（現・クラーク記念館）の小教室で片桐哲先生から十余名の学生が指導を受けた。三人の優等生がある。更井良夫さんは牧師となり、岡山にて博愛会病院もやられ、校友会岡山支部長も長くつとめられた。松山三郎さんは同志社や京都産業大学の教授をされ、現在は岡山で医院をやられている息子さんの所におられる。今谷逸之助さんは亡くなられたが、同志社の教授をされた。グリーの先輩でもある。私は牧師にも教授にもなれず郷里に帰り、父祖の家業（事

務機器販売)を継いで一介の実業人となった。

三、グリークラブ演奏旅行

(昭和三十年頃青森公演)

片桐哲先生と芳子奥さまは学生と二緒の汽車でお出下された。先生は渉外はもとより、弘前の東義塾での朝の礼拝に説教をなされた。又右学生の父兄を訪問して懇談をされた。奥さまは学生の健康状態をよく注意された。疲れている学生を早く見付けて休憩させた。帽子や服がやぶれたのを縫って下された。

その後同志社から別の音楽部が青森公演に來られた。部長先生が来ず学生だけであった。その中の一人が病気になる、入院せねばならなくなつた。次の公演があるので全員を出発させて、私共はその病人を引受けた。間もなく全快したもののその時の関係者の心配は大へんなものであった。

以来、校友会青森支部は、部長先生の同行されない団体の公演はお引受けしないことにした。この度は河野先生を初め渋谷部長先生ご夫妻が同行下さるというので大変喜んでゐる。

四、芳子奥さま

ナイチンゲール章受章井深八重さんとの親交。ハンセン病がまだ「らい病」といわれ、不治の病であり、恐れられ、嫌われていた八十年前、同志社女学校の同級生井深八重さんは「らい」と診断され、御殿場の復生病院に入院した。間もなくそれは誤診であるから家に帰るよういわれたが、井深八重さんは「看護婦としてこの病院で気の毒な患者さんのお世話をしたい」として、八十歳を越して亡くなるまで、気の毒な病人の世話をにつづけられた。その井深八重さんと芳子奥さまとは親交があった。井深八重さんは映画「ひとりしづか」のヒロインであった。

(昭和八年大学経済学科卒)

校友会青森県支部前支部長

同志社談叢

第十三号

論 文

- アーモスト大学のクラス・デーと
新島襄の日本語演説……………北垣宗治
- 同志社英学校の開発主義教育……………佐野安仁
- 新島襄「自責の杖」事件の謎(上)
—徳島猪一郎の同志社退学をめぐる—

本井康博

資 料

- 新島襄の大学設立運動(五)……………河野仁昭
- 同志社職員録—昭和二十一年〜二十三年度……………
- 同志社職員録—昭和二十二年度……………
- 同志社職員録—昭和二十三年度……………
- 新島襄に関する文献ノート(その二)

河野仁昭

(頒価一、〇〇〇円)

発行・同志社社史資料室
取扱い・同志社収益事業課
電話(〇七五)一二五一—三〇三七・八